

イタリアンライグラスへのエンバク極早生品種の混播による増収効果

○我有 満・桂 真昭・高井智之・山下 浩・松岡秀道・後藤和美¹⁾
(九州沖縄農研・¹⁾長野畜試)

【目的】

暖地の周年飼料生産において、草量確保が難しい初冬～冬期に収穫できる栽培法として、夏播エンバクとイタリアンライグラスの混播が考えられる。この場合、初冬～冬期にエンバク主体で収穫しようとすると、従来のエンバク品種では播種限界が9月中旬までとなり、イタリアンライグラスの適期播種が難しい。一方、9月下旬以降の播種ではエンバクの収量確保が難しくなる。エンバク新品種「九州14号」および「九州15号」は、夏播で出穂までの日数が従来品種より少なく、9月下旬～10月上旬播種で年内に出穂し、収量が確保できるため、イタリアンライグラスの播種適期での播種が可能、かつ年内におけるエンバク主体の草量確保が可能となる。また、冬期におけるイタリアンライグラス主体の生育期間が確保されるため、2番草以降のイタリアンライグラスの草量確保に有利と考えられる。以上の観点で、エンバク極早生新系統とイタリアンライグラスの混播栽培の利点について検討する。

【材料および方法】

九州農研(合志市)においてイタリアンライグラス「エース」にエンバク「九州14号」および「九州15号」を混播し、各番草の乾物収量を調査した。播種量(混播):イタリアンライグラス 3kg/10a エンバク 6kg/10a 播種量(単播):イタリアンライグラス 3kg/10a 播種日:2006/10/3 収穫日:2006/12/11(1番),2007/1/23(2番),4/4(3番),5/22(4番),6/14(5番) 施肥量:N:P₂O₅:K₂O = 10:10:10(kg/10a) 1区面積:6m² 調査面積:1m² 反復数:3

【結果および考察】

イタリアンライグラス「エース」にエンバク極早生品種を混播した場合、エンバクによる冬期の増収効果が大きく(図2)、春期のイタリアンライグラスへの影響は小さい(図3)ため、全乾物収量はエン

バクを混播することにより増加した(図1)。エンバク混播の利点として、1番草におけるエンバクによる増収効果が大きいことおよび2番草以降のイタリアンライグラスの減収が小さいことがあげられた。今後、イタリアンライグラスの適品種についての検討が必要である。

